

華道の現状と課題に対する 「いけばな療法」概念の革新性に関する実践的考察

浜 崎 英 子

華道は、単に花を飾る技術として受け継がれてきたものではなく、その作品の構成をもってその時代の価値観に基づくより良い社会の在り方を伝える手段として古くから活用されてきた。近年、華道人口の減少は著しく、各流派の所属会員も高齢化している。さらに若い世代の入門者数は激減しており、華道文化継承は困難な状況だとも言える。その理由として、斯界を横断する研究や実践、団体がなく、他流派との交流の希薄化、閉鎖的な活動範囲となっていることがあげられる。この課題を解決するために、華道が伝承してきた精神性を守り、特定流派内に限らず広い社会で誰もが華道の学びをいかして仕事ができるという新しい価値を生み出すことや、誰もがわかりやすく、学んでみたいという欲求を喚起させる方法を考案する必要がある。筆者らは、華道の精神性をわかりやすい言葉で定義し、その精神性に基づき、華道の方法論と効用を、心理学による科学研究の視点で捉えなおし、「いけばな療法」を考案、実践している。この実践の成果は、華道の現状課題解決に結びつく条件を兼ね備える、革新的な方法であることを本研究において明らかにした。

1 はじめに

私たちの生活を見渡すと、花は、衣・食・住・冠婚葬祭、絵画、音楽、あらゆるシーンに取り入れられ、人と深い関係にある。花を好み、花を愛でる心、花によって癒され元気づけられる心は、国籍、人種、性別に関係なく、人類に普遍的であろう。

日本には、花を活用した華道文化が室町時代より継承発展されており、その歴史をふりかえると、華道から人はこれまで多くの生きるためのヒントを得てきた。しかし、華道文化や花が人々の心理や行動、社会づくりにどのように影響するのかについては、科学的に未だほとんど解明されていない。

筆者は華道家、公認心理師としていけばなを通して子どもから高齢者まで障がいの有無にかかわらず、あらゆる世代の人々と関わり、それぞれの人々が自分らしさを取りもどし、人生に生きがいを感じ心がしなやかになる様子、そしてその周りの人々に気づきが与えられる機会に多く出会ってきた。

一方、華道界では、入門者が減り、所属会員の高齢化が進んでいる。また小さな流派は財政難から存続が危機的な状況のところも多い。とくに若い世代の入門者数は激減しており、華道文化の継承はこのままの現状では厳しい状況にある。

そこで、華道の方法論と効用を、心理学による科学研究の視点で捉えなおし、新しい生活技術として、教育場面、医療・介護場面、日常生活の様々な場面に提供できるのではないかと考えた。華道と心理学を融合した学術研究の成果を社会に還元し実践する具体的な方法として「いけばな療法」を開発し、2007年から取り組んできた。そして、この「いけばな療法」の実践と普及は、華道界の現状課題解決につながる成果が見えてきた。

日本の華道文化に、子どもから高齢者まで、人々の思考・情緒・行動の問題の軽減、心と行動のしなやかさを高める効用があるという新しい価値を見出すことができれば、華道界の発展のみならず、日本の生活文化の発展、新たな学術研究分野の開拓、社会の変革にもつながる。このような研究と実践を促進し、花とのかかわりを通じて、人々が、生きる力を育む様々な企画を推進・普及し、社会の公益に資することに努力していきたいと考え本研究に取り組むこととする。

本研究の目的は、「いけばな療法」の概念を華道の成り立ちや変遷と照らし合わせて明確にし、その普及が、華道界が抱える現状課題に役立つ革新的な方法になるのかを明らかにすることである。

2 華道のなりたちと役割

2.1 華道のなりたちといけばなの関係

華道の起源は仏前供花に始まるとされている。中国から伝来した仏教莊嚴の供花と日本の依代信仰による草花や樹木の扱いが習合して、徐々にいけばなが形成された（小林2013:5）。供花は香炉や燭台などの仏具とともに、仏前に飾る重要な道具の三具足¹⁾として扱われていたが、しだいに仏前以外の場所にも飾られるようになった。井上(2016)によると、花の名手と評される人物が現れるのは室町時代中頃で、寛正三年(1462年)2月25日の東福寺の僧侶の日記や、文正元年(1466年)の1月7日の相国寺の僧侶の日記に記録があるという。そして、「花を立てる。」という表現は、応仁の乱中の文明八年(1476年)3月25日の足利義政が後土御門天皇を参内した際に陪席した山科言国の記録に、立阿弥が花を立てたと記されているという。

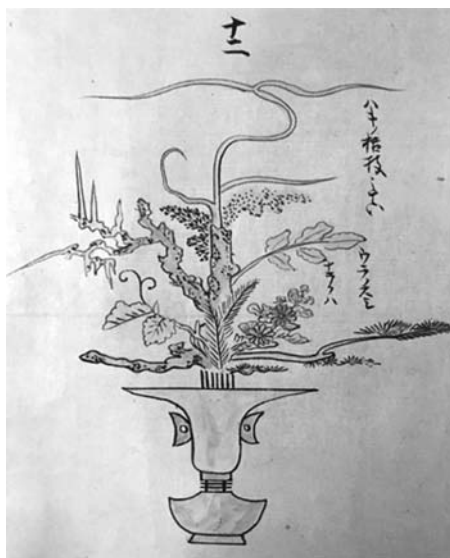
しかし、人が花を愛でる、飾るという行為は、枕草子に多くの花や植物の描写があることや、万葉集に、花に自分や他者の気持ちを例えて詠んだ歌が多くあることから7世紀には、花は人々の生活に取り入れられ、自分の表現したいことに活用することや、花の様子を通して人が思考や感情の整理に役立てていたと言えるであろう。「花を立てる。」という動詞は、供花から花瓶に花を約束事に基づいて立てた、「立花」という花型の成立と関連していると考えられる。「立花」の一瓶には、図1のように多くの種類の花が用いられ、構成する重要な枝を七つ道具²⁾と言い、全ての枝、葉、花に役割が与えられている。素材に使われるものは、写真1の名称が萩枯枝の立花であるように枯れた木、虫食い跡のある珍しい形をした葉、花が咲く前の蕾、葉一枚の場合もあり、一見不格好に感じるものであっても、立花においては貴重な存在として扱われ、型を構成する重要な役割が与えられている。

時代が進むと、「立花」は、より華やかで、豪華な素材を使用し、作品の規模も大きく、洗練の度を高めて宮中中心に発展していく。その一方で、茶の湯の花として、花そのものの美しさを味わうことを目的にした簡素な茶花も生まれ、立花のように立てるのではなく、斜めに花を挿し入れる投入花も町人文化の隆盛とともに流行した。

江戸時代中期には、庶民生活に合った投入花の要素と格式のある「立花」の要素も兼ね備えた図2のような「生花」³⁾と呼ばれる型が興る。「生花」が興った時期に創流した未生流の肥原(2013)は「生花」について、「生花は植物の出生を重んじ、自然と人との調和を求める理想を持つ天地人様式のいけばなで、この生花の出現によっていけばなが公家や武家などの特殊な階級の人のものから一般大衆のものとなった。」と解説している。「立花」が隆盛した室町時代には、花を立てると呼んだが、江戸時代に「生花」が流行し、花をいけると言うようになった。そこには、花をいかす、人をいかす、環境をいかすといった意味が込められるともいえる。「立花」を含め、いけばなという名称で華道の作品を呼称するのはこうした「生花」の誕生が大きく影響している。また「いかす」は、「生かす」「活かす」という漢字の意味が多義的にあり、そのためもあってか、日本いけばな芸術協会、京都いけばな協会においても「いけばな」や「いける」は平仮名表記である。そのことから本研究で扱う「いけばな療法」も平仮名で表すこととした。なお明治以降は西洋文化に、いけばなも影響を受け、現在は「立花(立華とも書く)」、「生花」、「盛り花」、「投入れ」の他に、自由な心持ちで型に縛られない作品づくりを行う図3のような「自由花」が主流になっている。

これらのことから本研究において扱う華道は、人が花や植物とかわる歴史的流れを

図1 池坊専栄作 萩枯枝の真の立花
 「手柄之花図」永禄7(1564)年伝



『別冊太陽いけばな』平凡社(1975)より画像引用

図2 生花。花材はエニシダ 筆者作成



図3 自由花。花材はカラー、赤芽柳、菜の花、リュウコ
 コリーネ 筆者作成



含む日本で生まれた伝統文化を指し、いけばなの定義は、特定の流派に縛られる流儀花を指すのではなく、人と植物が出会うことで生まれる作品、作品をつくるプロセスにより人や花、環境がいかされる行為を指すものとし、いけばなの変遷が華道文化を継承させ支えてきたと捉えることとする。

2.2 華道が社会で果たしてきた役割の変遷

華道は、単に花を飾る技術として受け継がれてきたものではない。華道成立前の時代に花をテーマにして詠んだ歌が数多くあることから、人々は、植物の様子を他者との関係や自分の心の状態に例えやすいことがわかる。小林（2013）は、華道について、いけばな作品の構成をもってその時代の価値観に基づくより良い社会の在り方を伝える手段として古くから活用されてきたと述べている。そこで、華道が社会においてどのような役割を果たしてきたかを整理してみることにする。

15世紀後期には将軍家から天皇家へ「たて花」という型式の花が献上され、それによって天皇家中心に、将軍家、公家、武家、僧侶、富裕層の人々のネットワークと仕事が生まれた（小林 2013:9）。人々は、花会を開き、自然への畏敬の念を集まる人々で共有し、その場は、社会性、人間性を涵養する場となった。その後花道という言葉が17世紀後期から使われるようになり、花道は精神的修練を理想とするものに使われ、いけられた花や枝の役割で封建的身分秩序を象徴的に言い表すなど、その時代の社会の秩序をより良く整える人の在り方を学ぶものとして活用され男子を教育した。男性特権階級社会のものとしてスタートした花道であったが、次第に女性や庶民層の社会にも浸透し、江戸中後期になると女子に対する教育にも取り入れられるようになり、華やかさを増し、華道の名称が使われ、女性の家事の一部、趣味、娯楽として捉えられるイメージが強くなり、花嫁修業、女性のなすべきものとして生活文化の位置を確立した。その後、複数の流派が生まれ、昭和バブル期には、女性の多くがいけばなを花嫁修業として学び、各流派も隆盛を極め、女性の嗜みとしてのイメージはより強くなっていった。

このように華道は、社会教育、学校教育に活用されていた歴史を持ち、その目的は時代により異なるのである。しかし、小林（2007）は、華道が、どの時代においても社会で果たしてきた役割は、人が生きる「心得」としての精神性が含まれているとしている。

すなわち華道から得られる学びの目的は、その時代に適応する姿勢を身につける人づくりであり、その時代の価値に基づくより良い社会構築にむけて、人々が主体的に行動

することを求めていると本研究では捉えることとした。ならびに、「いけばな療法」においても、この華道による学びの目的と「いけばな療法」の実践の方向性や実践者に求める姿勢は同じとする。

3 華道界をとりまく現状と課題

3.1 華道人口の減少

各流派の隆盛により自らの流派の発展や継続を尊重するあまり、流派の対立関係、流派への過剰な所属意識を持ち、他流派の学びを得ることは、罪のように扱われる様子も近年の華道社会では見られる。所属流派から枝分かれして地域ごとの小さな流派が創立され、その地域の女子が稽古に通い華道教室が地域コミュニティとして機能する時代もあった。しかし、社会のあり方がグローバル化していく中で、情報量の多い、知名度のある大きな組織の流派での華道の学びに価値を抱く人が増え、地域で創設された小さな流派は消滅傾向にあり、同時に華道入門者数は激減し、若い世代の華道への関心も薄れさせている。

華道入門者数が激減していることや若い世代の華道家がいないことは、各流派代表者との日常会話や日本いけばな芸術協会⁴⁾（日本いけばな芸術協会 2017）主催の日本いけばな芸術展の出展者に若い世代が少ないことから確かではあるが、客観的データは存在せず、本研究において華道界の抱える現状課題を明らかにするため、総務省統計局の社会生活基本調査データ（総務省統計局 2016）を基にして、華道人口を割り出し近年の華道人口の推移や年齢別人口の図を作成した。

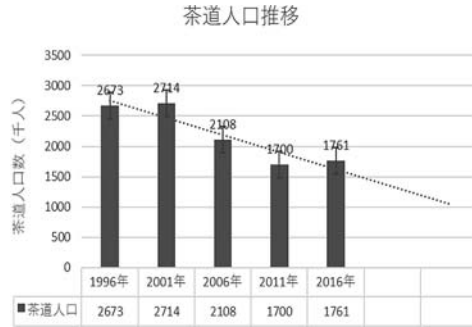
まず社会生活基本調査の10歳以上の人の趣味娯楽の種類別行動者数値、余暇活動の種類及び男女別行動者率を基に華道を趣味にしている人、余暇に華道に携わる人の数の推移を図4に作成した。この人口数には、年間を通して一度でも華道に携わったことがある人が含まれており、学校や職場での華道体験受講者なども含まれていることになる。図4によると1996年には4,567,000人の人が年間を通して華道に一度でも触れる機会があったが、20年後の2016年には、その半数以下の2,038,000人に減ってしまっており、日本において華道に触れる機会が大きく減少してきているのは明らかになる。他の日本の伝統文化の人口推移と比較するため、茶道人口の推移について同じく社会生活基本調査を基に図5に作成してみたところ、減少してきているものの、2001年、2016年には前年度より増えており、20年間全体を見ても華道のような極端な減少

図4 1996年から2016年までの華道人口推移



総務省社会生活基本調査データを基に筆者作成

図5 1996年から2016年までの茶道人口推移



総務省社会生活基本調査データを基に筆者作成

図6 週に一回程度華道に携わる人口数の推移



総務省社会生活基本調査、年齢、趣味、娯楽種別別行動者数(10歳以上) - 全国データを基に筆者作成

傾向ではないことから、華道人口減少の深刻さは明確である。

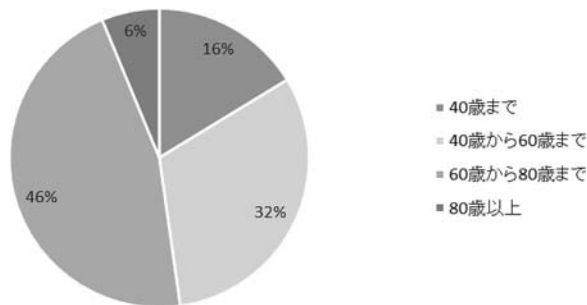
次に、一般的な華道教室の場合、週に一度の稽古が行われているため、日常生活において週に一回程度華道に携わると回答した人口を華道入門者、華道教室に通う人と想定し、その人口数の2006年から5年ごとの推移を図6に示した。2016年の週に一回程度華道に携わった人口数は、2006年の489,000人の4割程度の191,000人に激減しており、この数字からは最近10年間における急速な華道人口の減少、華道に入門する人が少なくなっている深刻な状況がわかる。

若い世代の華道人口を把握するため、2016年の2,038,000人の華道に携わった人の年齢層別データからその割合を図7に示す。この図からも明らかなように、現在華道に携わる人の年齢層は60歳以上の方が52%と高齢化しており、40歳以下の若い世代は16%で若い世代の華道離れは、各流派代表者が昨今抱いている感覚と一致し、これからの華道文化発展にとって危惧される状況と言える。さらに図8ではより細かく華道に携わった人の人口分布を提示する。このデータからは、50歳以上の人々、特に65歳から69

歳までの人が華道に携わっている人の多くを占めており、高齢化を危惧する一方で、華道は高齢になっても多くの人が嗜めることを証明していることにもなる。教育機関に所属している可能性が高い10歳から24歳までの世代の方が25歳から29歳までの世代よりも人数が多いのは、学校教育の中で伝統文化体験の機会が年に一度以上設けられることがあり、その経験者数が含まれていると考えられる。しかしながら、若い世代の華道入門者数が増えないことは、せっかくの体験が継続した華道への関心につながっていないことも示している。バブル期に花嫁修業として華道を学び免状を取得した人が存在するため、50代の華道人口も比較的多く、これらの人々による若い世代の後継者育成や華道を通して社会的役割を持つことに期待ができると考える。

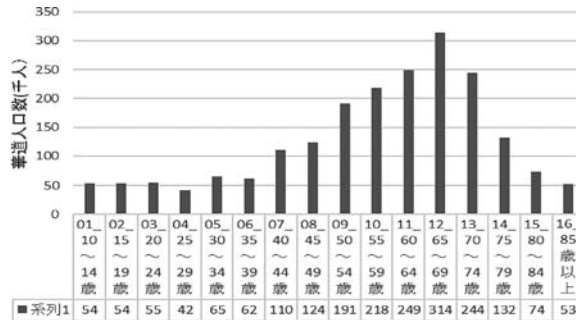
またこのデータからは、華道人口が急速に激減している理由は文化を継承する次世代の育成が滞ってきたことだと推察できる。実際に華道の三大流派のひとつである小原流が十代後半から三十代の女性124名に、いけばなに対するイメージをヒアリングしたところ、「良くいえば伝統的、悪く言えば古くさい。」や「いけばなそれ自体上品で、している人はひかえめで美しいイメージがある。外国人に好まれそうな、日本の代表的文化でありながら、当の日本人には遠い存在であるのでは。」といった、イメージは良いが自分とは遠い存在だという回答が多く見られた（今井1999）。つまり若い世代の人々の華道に対するイメージが悪いというわけではない。さらには、伝統文化としての華道に関心がないわけでもない。ただ、実際に自分がやってみるという気持ちになれないということではなからうか。これらのことから、華道界が抱える現在の課題の一つは、華道に携わる人の極端な減少傾向と若い世代が華道に入門したいという気持ちが抱けず、後継者育成が滞っている状況だということがわかる。

図7 平成28年度の年齢層別華道人口割合



総務省社会生活基本調査, 年齢, 趣味・娯楽種別行動者数 (10歳以上) - 全国データを基に筆者作成

図8 平成28年度の年齢層別華道人口分布



総務省社会生活基本調査、年齢、趣味・娯楽種別行動者数（10歳以上）-全国データを基に筆者作成

3.2 仕事としての華道とフラワーアレンジメントの現状

華道の免状を取得した人は、その資格を用いて教室を開くことや、花展に作品を出展することができるようになる。収入は月謝収入が主になり、商業空間や公共のスペースに作品をいけこむ仕事からも収入を得ることができる。しかし、家元制度による階級がどの流派にもあり、教室や作品のいけこみの仕事で十分に収入を得るためには、その階級の上を目指し、華道の免状取得をし続けなければならない。免状取得のために必要な費用や花展への出展費用などの支出を考えると華道の免状を取得しても、収入を得ることは容易ではない。熊倉（2012:198）によると、家元は、統制、教育機関を通じて全門弟にその権威を及ぼし、流派の諸芸の免許を与え、その流派にそむいた門弟を破門されると解説している。つまり、華道においては、流派の型や掟を守ることが優先され、花をいける技術が客観的に評価されにくく、技術よりも、家元と血縁があること、流派所属年数や階級の上層部が優先される傾向にあり、権威主義的な社会の要素が強く、家元家系でない弟子が末端の入門者からはじめ、華道を仕事にし、収入を得られるようになるのは、非常に難しいと想像できる。また免状の金額についても、所定の金額に所謂「お礼」を加えることや、料金の公開がされない流派もあり、自分が資格取得するまでの経費の計算がしにくいといった、現代社会では理解ににくい一面も華道界にはある。

同じく花に関する仕事につながる、西洋のフラワーアレンジメントを学ぶスクールや資格制度に目をむけてみると、どのスクールも受講カリキュラムや期間が明確に公開されている。国家資格であるフラワー装飾技能士資格⁵⁾（1級・2級・単一等級）や公益社団法人日本フラワーデザイナー協会（NFD）による資格認定制度などもあり、資格取得後の就職の紹介も行われており、NFDによると28,000人の資格取得者がこれまでに

排出され、花屋、ブライダル業界などで働いているという（フラワーデザインの資格・検定 2017）。花に関心があり、花にまつわる仕事がしたい人々が、華道のように特定流派内での技術習得ではなく、社会全般で通用する技術習得と公的な資格取得が可能で、技術、知識の習得後の道標が華道よりも明確にされているフラワーアレンジメントの世界に入門する傾向になるのは仕方がないとも言える。

つまり華道で生計を立てるには、家元家系や長年続けている高齢者でないと収入が十分に得られるチャンスがないうえに、入門し、学び続けたからといって確実に仕事につながる保障もないというのが現状ではなかろうか。

3.3 斯界を横断する研究、実践の不足

華道の書籍を調べてみると、流派ごとの詳しい歴史や理論について書かれているものはいくつか見られるが、華道界全体を統合的に研究し、書籍にまとめられているものは数少なく、手に入れることも難しい。

そのようななかで、文化庁が、茶道、華道の団体の実態を把握するために、全国規模で調査した伝統的生活文化の実態調査報告書の中に貴重な結果が掲載されている。文化庁文化財部（2016）には、伝統的生活文化の斯界全体を横断的に網羅し、評価する研究として2016年までの20年間で華道は3つ、茶道は9つの研究があげられており、専門誌は、華道は3誌、茶道は15誌である。この結果から、華道について、横断的で網羅的な専門誌や研究論文は非常に少なく、斯界全体の概要を把握するのは容易ではないとし、普遍的な価値観から華道を評価するのは難しいと推測している。

また、同調査では、伝統的生活文化の茶道と華道に共通する現状課題を全国の流派へのアンケート調査結果をまとめて、次の3つをあげている。

- ①生活スタイルや価値観の変化による若者の伝統的生活文化離れ
- ②会員の高齢化と指導者及び会員数の減少
- ③教室の財政難

この結果は、華道のなりたちと役割の中で、明らかにした結果を裏付けるものとなる。

さらにこの調査では、華道特有の現状として、自治体と連携した公共空間での地域への貢献可能性や海外展開への意欲をあげている。しかしながら多くの流派に分かれ、発展や分流の経緯を理由に、他流派との交流の希薄化、閉鎖的な活動範囲に陥っており、実態把握が困難であることも指摘している。そこで、華道流派の横断的組織は、いけばなの精神性（人の心を豊かにする）を守っていくことが重要であるという認識をもつ

ていることから、これが華道の本質に該当するものとまとめている。

これらの結果から、今後の文化庁の展望としては、学術的調査・記録、研究等の推進、伝統的生活文化に係る教育人材の育成、教育機関と連携した伝統的生活文化の普及啓発をあげ、具体的な方法として、小中学校での伝統文化体験のみならず、大学教育への取入れ、「伝統文化士」のような国家検定を設け観光業等への就職メリットにつなげることなどにふれている。しかし、これらは、華道に特化したプログラムではなく、華道、茶道、香道といった伝統的生活文化をひとまとめにした方針にすぎないのである。華道については、教育に取り入れていくにあたり、流派共通のいけばなのカリキュラムを決めることが先決であるとの声もあると指摘し、斯界全体を取りまとめる取組やマネジメント組織が必要不可欠であり、それらの取組や組織の構築に在っては、各流派の文化的価値等を客観的かつ公平に評価する第三者的視点を持った支援が望まれると結論づけている。

3.4 斯界を横断する華道家の活動から現状課題を考える

特定流派の考えではなく、華道文化を統合的、俯瞰的に捉えて活動や研究を行っている団体の代表的人物3名の研究や活動の方向性を調査し以下に整理する。

まず、京都いけばな協会⁶⁾前会長、日本いけばな芸術協会役員、華道本能寺華務長⁷⁾の中野恭心氏である。中野氏は、京都いけばな協会会長を2015年度まで2期にわたり務め、現在も相談役として、京都の華道界を牽引している。日本の華道界を代表し世界各国でいけばなデモンストラーションを行い、華道での親善大使を務め、京都御所迎賓館において国賓へのおもてなしいけばなをいけ、いけばなレクチャーも行っている。華道界の現状を国内外で主観的、客観的に良く知る人物であり、「いけばな療法」の成果が華道界に及ぼす影響についてインタビューを2016年10月4日に行った。

中野氏は、「いけばなが女性の嗜みとして扱われ、花嫁修業として多くの人が学んだ昭和バブル期以降、華道人口は減少の一途をたどり、華道に携わる人の高齢化も進んでいる。」と話した。さらに、植物が地球上で進化し続けてきた過程をふりかえり、「植物は環境の変化に自分の身を動かして適応するのではなく、その環境に適応して自分を変えて生きてきた。人間は植物がこのようにただひたすらに生きていく姿勢から、今を生きる意味や命の大切さを学んでいる。華道はそのことをいけばな作成プロセスや作品の構成から感じることができる。華道発祥期には、天皇、貴族、武士など世の中を動かす重要な人物が花をいけていた。現代においても女性の嗜みとしてだけでいけばなを捉え

るのではなく、生き方、社会の在り方を考え、学ぶものとして、女性はもちろんのこと、ビジネスマン、政治家、経営者などの男性にもぜひ取り組んでもらい、仕事に役立ててもらいたい。そのためには、流派それぞれの努力も必要であるが、華道界全体として華道の価値をどのように社会に広めていくかを考えなければならない。」と語り、その一つの方法として、「いけばな療法」の普及に期待すると述べた。

次に国際いけばな学会⁸⁾を運営する小林善帆氏、井上治氏の研究や活動に着目する。小林善帆氏は、連歌、女子教育、園芸、建築といった華道に関連してきた分野の研究成果を華道という角度から考察し、それにより、「花」の歴史の新たな側面を解明している。井上治氏らと国際いけばな学会を設立し、文学、歴史などの分野を華道に関連させながら議論している。いけばなの研究会は、技術を高める目的のものが、流派ごとで盛んに行われているが、いけばなを学際的に研究する「国際いけばな学会」のような組織は、他になく、学会設立の趣旨は、いけばなが、実作者の世界だけに閉じこもりがちであることは、賢明ではなく、学会の発足により、研究者といけばな実作者、さらには諸々の研究関連の間における相互理解の場を提供することとされている（国際いけばな学会2017）。また国際いけばな学会において、心理学や社会学、政策学の分野からの華道に関する考察はこれまでになく、本研究に対して、興味を抱いてもらうことができ、筆者の実践する「いけばな療法」の活動を学会誌に掲載していただいた。小林氏は、華道を通じたコミュニティの形成や社会で華道がどのような役割を歴史的に果たしてきたのか、外国でのいけばなの普及や成り立ちを明らかにする研究もしており、華道の国際的な普及に、流派所属の視点ではなく、学際的な研究者の視点で取り組んでいる。

伝統文化の研究者である井上治氏は、華道家でもあり、花道思想、花伝書についての研究も多数行っている。京都造形芸術大学で研究と教鞭をとり、通信制講座や一般向け公開講座も担当し華道、茶道、香道、和歌といった伝統文化の相関関係を広く社会に発信している（井上2017）。研究、教育活動のみならず井上氏は、2014年頃から、FacebookにKSKC-from Ikebana into Kadoというページを立ち上げ、自身のいけばな作品や様々な華道家のいけばな作品を投稿して、海外に公開してきた。ページには21,000人近い「いいね！」⁹⁾を獲得し、発信力は大きく、特に外国人がページをシェア¹⁰⁾する様子が多く見られるようになり、その後いくつかの海外向けのいけばなページがFacebookでも立ち上げられている（Facebook2017）。また、国際いけばな学会の副会長も務め、華道文化の発展に多角的な視点から取り組んでいることが窺え、一流派にこだわることなく、また日本の伝統文化全体から華道の方向性、将来性をとらえている。これら

3名の華道家の活動や研究は、それぞれ流派の所属はあるものの、その枠組みを超えて華道の真髄を見極め、議論し、華道界全体の課題解決や普及に貢献しようという姿勢を汲み取ることができる。

以上本節で検討した結果から、華道界の現状をまとめると、携わる人口数が激減しており、特に若い世代の入門者数の減少は深刻であるということがあげられるが、華道文化に対する社会の印象は良く、伝統文化として尊い存在に感じている人も多い。そして、海外においても華道は、関心が高いと言え、海外展開を期待する華道家たちも多いことや、国内においても、より多くの人に華道文化に触れてもらう機会を、華道家も自治体や公共空間との連携で作っていきたいと考えていることもわかった。今後、華道に対する人々の好印象を覆してしまうことなく、若い人を含め、多くの人が学んでみたいという行動に移すためには、次の3点のことが必要と言える。

- ① 伝統文化としての華道の本質や華道を通して人が得られるものを誰もがわかりやすく明らかにし、学んでみたいという欲求を喚起させる方法を考案し、普及していくこと。
- ② 特定流派内に限らず広い社会で誰もが華道の学びをいかして仕事ができるという新しい価値を生み出すこと。そのためには、具体的な仕事にしていくためのシステムを構築し、費用や修得方法を明確にして制度を整えていくこと。
- ③ 国内だけを対象とするのではなく、海外においても華道は社会的価値のあるものとなること。また、コストを抑えた、海外向けの普及方法があること。

本稿では、これら3つの条件が、「いけばな療法」の実践において成立し、華道界にとって革新的な提案となるのかということを検証する。その方法は、これまでの実践の成果をもとに検討する。

4 「いけばな療法」概念の革新性

4.1 「いけばな療法」の考案

社会を変革するための第一歩について、Murray et al. (2010:12-13) は、課題に対して、これまでになかったアイデアの構築から始まるとし、そのきっかけは気づきであるとしている。筆者は、カウンセリングを実践する訓練を受ける過程で、次のようなこと

に気づいた。人と人との適切な関係や社会に適応する姿勢というのは、いけばな世界の花の構成や、花に向き合うときの自分の心の在り様、時間とともに一輪の花をとりまく環境が変化していくことを通して学ぶことができるのではないかということである。

また、いけばなの教室の指導者であった筆者は、学習者が自らの力で、困難な状況を乗り越え、自分らしい作品ができたと感じることが、その人の成長に結びつき、もっとやりたいという気持ちを引き出すことも実感した。そして、このような気持ちを引き出すには、いけばなを教える側に次のような姿勢が求められることにも気づいた。カウンセリングでは、どのような状態の人も自分自身の力で、内的な可能性、資質を発展させ成長させることができるという信頼を相手によせ、そうすることで、相手が自ら成長していく。また、発達心理学では、人は、生涯を通して変化し続け、発達すると捉える。つまり、いけばなを通してかかわる側には、この相手に対する信頼が揺るがず存在することや、例えば認知症高齢者であっても心理的な発達や成長があると捉えていく姿勢が必要である。

そこで、心理学による科学研究の視点でいけばな制作プロセスや、花の見立ての行為等を捉え直し、理論化することで、「いけばな療法」を考案することとなった。そして、いけばな制作プロセスごとで療法的な要素を整理することで、「いけばな療法」の対象者は、子どもから高齢者までどのような状態の人であっても幅広く適応できるツールとなると捉えた。また、対人援助の理論を「いけばな療法」を実践する側の姿勢として整理し直し、「いけばな療法」の目的と華道の精神性との関係性を考察するに至った。

4.2 華道精神と「いけばな療法」の活動理念の関係

華道文化の発祥のスタイルとなった「立花」(図9)には10種類以上の蕾や枯れた花や枝葉も使うことがあり、その構成の中では、それぞれに与えられた役割がある。「立花」から「生花」、現在主流となった「自由花」へと変化していても、(図10)のような小品であっても、一つ一つの花材には、やはり変わらず役割があり、そのどれが欠けてもその作品は成り立たない。その花や葉、枝の、その瞬間の個性が、作品の中でそれぞれ尊重されたものとなっている。

華道最大流派である池坊では、「虫食い葉・先枯れの葉・枯枝までも、みずみずしい若葉や色鮮やかな花と同じ草木の命の姿ととらえ、美を見出すことが池坊の花をいける心であり、理念です。」(池坊2017)と述べられており、草月流では「花はいけたら、人になる。自分のいたらなさや弱さを受け止め、自分と向き合うことでもある(勅使河

図9 枯れたものを素材にした「立花」作品
華道本能寺家元華務長中野恭心制作



図10 枯れたものを素材にした「小品いけばな」作品
筆者制作



原 2011:3)。」とされている。さらに、小林 (2013) では、華道はその時代に適応したより良い人の在り方、社会の在り方を学ぶ手段と説明されている。これらのことから、華道は、花やいけばなをただ単に美しくいけることを求めるのではなく、花やいけばなを通じた精神的な修練を求めていることがわかる。つまり、華道が求める精神性とは、美しさがある一方向から観た完全な形と捉えるのではなく、不完全な形であっても美しいと思う心を育み、植物の様子から人や社会のより良いあり方を知ろうとする姿勢のことだと捉えられる。

そのため、「いけばな療法」の普及や花やいけばなによる、より良い社会づくりを目的に活動するために、筆者らが2009年に立ち上げたNPO法人フラワー・サイコロジー協会では、誰もがわかりやすい言葉で、活動理念として提唱し、華道の本質や精神性を伝えることにした。その活動理念とは、「価値のない花や人はない。一輪の花の命と個性を尊重し、存在価値を認めていくことを通して、人も同じであることに気づく。」というものであり、これは、活動を社会に報告するNPO法人発行のニュースレターにも常に記載し、広く社会に提案しつづけている。

このような華道が求める精神性は、福祉理念であるノーマライゼーション¹¹⁾、エンパワメント¹²⁾、ソーシャル・インクルージョン¹³⁾の概念、対人援助論の基本姿勢¹⁴⁾と共通することに気づける。そのため、「いけばな療法」による対人援助方法論では、誰もが役割を持ち社会参加することを目的とし、人も植物も同じ命ある存在であり、いけばな作品制作過程において、花に触れることで、人は諸感覚を刺激され、花の生命力を感じ取り、命ある自分の存在や他者の存在への気づきがうながされることに主眼を置き構

成している。

福祉の分野の一例として認知症ケアを取り上げてみる。その基本的な考え方として、パーソンセンタード・ケア (person-centered care) が提唱されているが、パーソンセンタード・ケアは、認知症を抱える人を一人の人として尊重し、その人の視点に立って、行動や状態を理解しようとするもので、今のその人の状態を心理、社会的背景や疾患の種類、生活歴やスタイル、障害の状態といった多様な角度から捉えて、理解した上で、その人らしさを引き出し、ケアを考えていく。このようなケアにおいては、介護者にとってこれまで問題と捉えられていた暴力や落ち着きのなさといった認知症に見られる行動や症状も問題ではなく、一つの表現と捉えていくことができる。その問題の背景を考えられるようになると、問題は、その人のニーズや生活スタイルなどを知るきっかけとなり、問題ではなく、重要なメッセージとして扱えるようになる。これは、「いけばな療法」の考えのベースである華道の精神性から学ぶ姿勢と共通する。その姿勢とは、一つの花材が枯れたり、蝕んだりして完璧な形や状態でなく、一見不要に思えたとしても、その状態を認め、個性として尊重することである。また、そのような状態に至ったプロセスが作品の中でいかされると、その完璧ではない状態の素材は、不要どころか重要な素材と捉えられるようになる。つまり「いけばな療法」においては、認知症の症状があるため、できないことを援助するのではなく、その人ができる力を引き出すこと、その人らしさを表現することに寄り添う姿勢が重要だとしており、パーソンセンタード・ケアの考えと一致するともいえる。そして、その姿勢を実践者は、いけばなの理論と照らし合わせて学びながら習得していくのである。

このように、「いけばな療法」では、華道の現状課題解決の条件としてあげた、華道の本質や華道を通して人が得られるものを誰もがわかりやすく明らかにすることに取り組んでおり、そしてそれを実践の中で、実践者が態度として身に着けることと、その振る舞いや技術を通して、新しい形で華道の精神性を伝え、発信するということに取り組んでいる。

4.3 「いけばな療法」の対象者

「いけばな療法」の対象者は、病気や障害のある人のみならず、健常な状態の人も含めており、誰もがその対象となりうる。その理由は、「いけばな療法」の最終的な目的は、より良い社会づくりだからである。例えば、認知症非薬物療法の「いけばな療法」の開発、実践においては、第一の目的は認知症高齢者の症状緩和と参加者が自分らしく

より良く生活することである。しかし、認知症非薬物療法の適用範囲は、認知症疾患診療ガイドライン（2017）で、家族や介護する人への心理教育的な介入も含むとされている。そのため、「いけばな療法」においても、認知症に対する正しい理解、自分とは違う状況の人を社会が認めることにつながるように、子どもたちや高校生、大学生が認知症高齢者といけばなで交流し、それぞれがその時の自分にできる役割を持つことや、まちづくりのいけばな制作活動に介護者とともに認知症高齢者が参加すること等を行っている。

また心理カウンセリングには、療法的なものだけではなく、開発的、予防的なカウンセリングがあり、その目的や対象者は、援助段階や心理的発達レベルにより調整される。例えば、「いけばな療法」の開発的カウンセリングの例としては次のようなものがある。小学生の子どもを持つ母親を対象としたPTA主催の「いけばな療法」の要素を取り入れたワークショップは、日常生活における、ちょっとした子育てへの認知の偏りや歪みを調整し、ストレスを軽減することを目的に行った。その結果、子育てに対する「視野狭窄」、「注意バイアス」、「後悔」、といった態度について、心理測定尺度を用いて前後で評価したところ、良好な変化が有意に見られ、その参加者の中から「いけばな療法」の理論を学ぶ人も現われた（浜崎2017）。

いけばなの概念や方法について、社会に広く伝えていく方法は、これまでは、いけばな作品展といった形で行われてきた。「いけばな療法」においては、ここで述べた実践、研究の報告を国内外の学術会議で2010年より毎年欠かさず発表しており、さらにその成果はニュースレターや講演会を通じて一般の人々にも伝え、まちづくりの場においても広く周知する機会を設け、客観的かつ公平に評価される機会をつくっている。

つまり、個人へのアプローチから成長レベルに応じて、その人が主体的に参加できる社会へのアプローチを用意し、社会の意識や価値観を変える構造的なシナリオを持って、華道が人づくり、社会づくりの役割を担えるようになることが、「いけばな療法」の目指すところであり、これは、華道精神、福祉理念、対人援助論やフラワー・サイコロジーの理念を包括している。これは、華道文化の今後の課題としてあげられている、斯界を横断する学術的調査・記録、研究等の推進に「いけばな療法」は貢献できる可能性もあるということであろう。

4.4 フラワー・サイコロジー型「いけばな療法」の手順

いけばな療法の手順は非薬物療法の要素をプロセスごとに取入れられるように構成

し、表1のように考案し実施している。フラワーショップが行う花の教室の実践手順を見学し、一般的な流れ（以下一般型教室）とし、筆者らが行う方法をフラワー・サイコロジー型とし、その比較を表1に整理している。一般型教室の流れを確認するため、6名のそれぞれ違う流派に所属するフラワー・サイコロジー型体験者の華道家に所属流派での教室の流れを確認するヒアリングをしたところ、違いについて次のように共通して述べた。

「フラワー・サイコロジー型は、その日に自分がいけたい花を選ぶ、いけ方も自分で選択する自由があり、自分が表現したいことを自由に安心して取り組める時間である。出来上がった作品を鑑賞し、評価するのではなく、感じたことを参加者がフィードバックをしてくれる時間があり、自分が気づいていなかったことを知る機会となる。所属流派での教室は、花材は先生が受講生全員に同じものまたはレベルごとに同じものを用意する。自分がいけた作品を先生が手直しをする。先生の考えや表現したいことと一致しない場合は、すべて抜いてやり直されてしまう場合もある。いけ方については、自由にいけて良いことも時にはあるが、ほとんどの場合は、見本の作品があり、その通りに観察しながらいける。出来上がった作品を全員で鑑賞するという機会はあまりなく、先生のみが作品の評価をして、終了する。流派の教室は技術の上達のために行かなければならない場という意識が高いが、フラワー・サイコロジー型は自分が楽しみに行く場という感覚が強い。」

以上のことから、一般型教室の手順は以下の流れであり、表1のフラワーショップ実施の教室の流れとも一致していると考えられる。

- ①用意された花をいける。
- ②見本の作品のとおりにいける。
- ③見本と違うところは講師が手直しする。
- ④いけ終わった時点で終了。

この手順にもあるように、「いけばな療法」の手順では、表現の見本は存在しないため、特定流派のスタイルにこだわる必要はない。その理由は、内発的な動機づけを高めることを目的に含んでいるからである。動機づけを高める方法として、成功や達成の見込みが五分五分の挑戦的な目標を与えることや、自分の力で成功した喜びを感じとらせること、つまり、自分の努力によって成功したという体験をもたせること、行為の主体は自己であるという意識をもたせることなどがあげられている（社会福祉士養成講座編集委員会 2008）。

表1 「いけばな療法」手順。一般型の教室と比較して筆者作成

| | 手順 | 方法（一般型教室） 25分～ | 方法（フラワー・サイコロジー型「いけばな療法」）60分 |
|---|-----------|--------------------------|--|
| ① | 花を選ぶ | 5分 あらかじめ用意した花を配る | 10分～15分 本人が好きな器を選ぶ。水を入れる。何種類か用意した花の中から自分のいけたい花を選ぶ。今日の花の解説をし、五感で花を味わう。（香り、手触り、色、形など感じてもらう。）見当識へのアプローチも行う。（季節、行事、花の名前や色の名前など確認。） |
| ② | 切る | | |
| | | 切ることが出来ない人は、講師が切る。 | その人のレベルに合わせて、危険がないように見守りながら、本人が切る。場合によっては手を一緒に添えて切る。（身体機能の訓練を意識して実施。ハサミなど道具を利用。） |
| ③ | 構成する（いける） | 20分～ | 20分 |
| | | 見本どおりにいける。出来ない人は、講師がいける。 | その人がいけたい表現を引き出すかかわりをしながら、本人がいける。レベルに合わせてできることに取り組んでもらう。表現は尊重し技術面だけサポート。（身体機能の訓練、葛藤や欲求のコントロール訓練を取り入れることを意識し実施。） |
| ④ | 飾る | なし | 5分 |
| | | 終わった人から帰る。 | 完成後に改めて、参加者全員が見やすい場所を設定し、テーブルや台に飾りなおす。 |
| ⑤ | 鑑賞する | なし | 20分 |
| | | セッション中はなし | 一人ずつ作品を順番に全員で鑑賞する。見当識訓練、回想法等を取り入れる。感情や思考を言語化してもらう。自己開示とフィードバックをそれぞれの作品において行う。対人関係の課題などある人は、それをふまえて言葉がけを行い、良好な他者とのコミュニケーションにつなげる。日常生活での花のお世話を依頼して終了。後片付けもできる人は行う。 |
| | 費用(花代) | 2000円程度 | 1000円～1500円程度 |

このことを踏まえ、いけばな療法士は、参加者が花を切る、留めるといった技術的なサポートを必要とする場合は、「やってあげる。」「教えてあげる。」という関りではなく、その人のレベルに応じて、少しの援助で本人ができる方法を見つけて、サポートをしていく。また花の構成について助言を求められた場合については、いけばな療法士の経験から、複数の提案を行い、その中から参加者本人がより自分の表現したいことは何か、に気づくことや、自分の伝えたい表現に近い方法を選択していく。つまり、作品は、参加者のものであって、いけばな療法士のものではないことを常に意識し、参加者の自己決定、自己決断の機会があることで、もっとやりたいという動機づけを導き出す方法になっている。

実際に、大学生20名を対象として、一般的ないけばな教室とフラワー・サイコロジー型によるいけばな教室を体験し、その後の気持ちの変化と自由に感想を述べてもらう比較実験を行った際に、その効果がみられた。一般的な教室後の感想では、「もっと練習しなければならなかった。」「バランスを考えていけなければならなかった。」「空間をいかすことを考えなければならなかった。」という「～しなければならぬ。」の語尾を使う感想が多かった。これに対してフラワー・サイコロジー型では「次は違う雰囲気のある作品を作りたい。」「もっとやってみたいと思う。」「別の花もい

けてみたい。」「ほかの人がやっていたことを自分もしてみたい。」という「～してみたい。」という語尾の感想が多く見られた。また気持ちの変化については、「楽しい」という気持ちがフラワー・サイコロジー型においては有意に高まる結果となった。華道の現状から明らかになった、いけばなの体験授業が学校教育の中で取り入れていたとしても、その後華道に入門する人が少ない状況においては、一度の貴重な体験の機会が、「もっとやりたい。」とか「楽しかった。」という気持ちを喚起させる方法でなければならない。そのための方法の一つとして、フラワー・サイコロジー型で行う教室は、やりたい気持ちを引き出し、参加継続することにつながる可能性があると言えるのではなかろうか。

4.5 「いけばな療法」の実践者が華道界に及ぼす影響

「いけばな療法」の実践は、華道家が、いけばなの先生や花展への作品出展といった芸術分野での役割を持つということにとどまらず、福祉、教育、医療、まちづくりの多分野で役割や仕事を得ることにつながる。またこの活動は、どの流派に所属する華道家であっても参加が可能で、2020年7月時点のNPO法人フラワー・サイコロジー協会では「いけばな療法」を実践している人の所属流派は7流派で、フラワーアレンジメントの資格取得者もいる。各自が学んできた流派の華道資格やいけばなの技術、知識が心理学、福祉、介護、医療等に必要な学びと融合され「いけばな療法士」として互いに交流することで、これまでになかった流派の垣根を超えた華道家同士のネットワークやコミュニティができていく。実践者の中には、華道や花の資格を持たず、心理学や介護の専門的知識に関心持つ人やその分野の専門職の人も多数いる。資格取得や習い事の情報サイトを調べると、セラピスト、心理系職業、福祉系職業といった対人援助に関する仕事に女性の関心が高い。つまり、いけばなの学びだけでなく、福祉や心理の学びの入口が加わることで、華道文化にふれる機会がなく、関心がなかった人も、「いけばな療法」を通じて、華道の精神性を知り、華道入門者が増える可能性も期待できる。

華道界にとっては、「いけばな療法」は各流派の存在を否定せず、それぞれの華道家が各自の流派に所属したまま、華道界全体としての発展につながる組織に所属するイメージを持ち、華道を学ぶ人々の新しいビジネスの機会となる役割を担っていく。また、実践現場や収入の安定性が確保できれば、いけばな療法士は、女性がやりたい職業、取得したい資格としても高いニーズがあると仮定できる。

「いけばな療法」を実践したい人を養成していくことは、いけばな療法の理念、つま

り華道の精神性を知り、認知症や精神的な疾患を抱える人など社会的排除状態になりやすい人々に対する正しい理解や具体的ななかかわり方についても学ぶことになる。そして流派それぞれの存在を否定することなく、流派の枠組みを超えた華道の共通した精神性を含むいけばなの本質が社会に広がることとなる。つまり、「いけばな療法」が社会に普及し、それを学び、実践していく人も増えていくということは、華道界、社会的周縁者を取りまく状況の両者の課題と課題解決の方法について個人レベル、社会レベルで意識変容をうながし、主体的により良い行動へと移す人が増え、社会変革のきっかけづくりができると考える。

これらのことから、「いけばな療法」を実践展開していくことは、華道のこれまでの歴史を継承する連続性とこれまで華道とは直接的に関係がなかった医療、介護、福祉の分野へ華道が今後かわりを築いていく発展性を持つと言える。それは、華道に携わる人々の新しい仕事を生み出すことにもなり、華道界が抱える現状課題解決につながり、さらには現代の高齢化社会が直面する課題など、社会課題解決に結びつく視点も兼ね備えることができると言える。

4.6 社会的価値を発信する「いけばな療法」の方法

「いけばな療法」の方法論は、いけばなの制作プロセスとその作品を活用し、人々の心理面や行動面、その発達に対して療法的に介入できるように、開発しており、認知症の非薬物療法としての実践にも取り組んでいる（浜崎 2013）。その効果は、認知症疾患治療ガイドライン作成合同委員会（編）（2010）による非薬物療法の標的分類項目の認知面、感情面、行動面、心理面へアプローチが可能であることがあげられ、花をいけている人のみならず、その行為を見守る人や、集団への関係性にも波及していく（浜崎 2017）。特に攻撃性や易怒性を持ち、集団から孤立の傾向を有する人が、花を介することによって、集団への参加を自然な形で促進することは「いけばな療法」の特徴としてあげられる（浜崎 2011, 2017）。この成果を評価され、「いけばな療法」の実践は、2017年に読売福祉文化賞を受賞した。

この「いけばな療法」の特性をいかし、社会的なつながりが得られにくくなっている人々にも社会参加の機会を提供する「いけばな街道」を考案し、実践を2018年より行っている。この方法は、認知症の人が施設でいけた、いけばな作品を施設から持ち出し、施設外の公共空間やまちづくりのイベントの場所で展示するもので、介護施設、地域団体、行政機関、関連企業、花の生産地、教育機関などのネットワークとの協働で行

っている。その効果は、作品を出品した認知症の人は、社会で役に立った実感と喜びを表し、地域の人や、協力者も、認知症の人が活躍できる場を提供できたことに喜びを感じ、認知症の人の作品は期待以上と評価した。そして、「いけばな療法」をとりまくネットワークは、使用した花「スターチス」の生産地、企業との連携協力など当初予想しなかった分野への広がりを見せ、認知症介護者、活動協力者の「いけばな療法」への関心も高まり、社会への浸透、普及にもつながった。また非薬物療法は、病気の治療という側面だけを強調するものではなく、適用範囲を社会にまで広げることができ、対象者が社会で役割を楽しみながら持つことに効果がある療法として捉えていく社会的役割を持つものであるということを「いけばな街道」により発信することにもなった（浜崎2020）。

つまり「いけばな」の社会的意義や価値が、「いけばな療法」による社会参加モデル「いけばな街道」の実践によって確認でき、これまでに関連がなかった新しい分野においても認められる結果となったのである。

5 「いけばな療法」を普遍的かつ革新的な 価値あるものとするための実践の課題

5.1 いけばな療法士の養成プログラム

華道の学びをいかして仕事ができる人物を養成していくためには、教育の分野でのいけばなの取入れが必要となる。そのためには、流派共通のいけばなのカリキュラムを決めることが先決だという指摘を文化庁文化財部（2016）の調査で述べられている。

現在、「いけばな療法」の実践者を養成する講座は、次のような段階を持った構成で開講している。初級は「いけばな療法」に必要な基本的な知識・技能の習得と「いけばな療法士」としての振舞いの在り方、模擬講座の実施である。いけばな療法士としての振る舞いの在り方については、重要な華道の本質性を学びながら、習得していく。そして、この講座の特徴的なところは、いけばなの基本的な技術習得を心理学や対人援助の理論に照らし合わせて、学んでいくところである。例えば、枝を見立てる際には、人の知覚が関連していることを学んでいく。人は、連続性のある部分をひとつのまとまりと認知しやすく、短く切る際には、その連続性の流れを変えずに切断することで、枝を短くしようとしてしまう。しかし、枝をまとまりとして捉えず、注意深く、部分に着目して観察していくことで、自分が選択したい部分に気づけるという説明をする。この

ように解説すると、いけばなの技術を裏付ける学問の理解もでき、また心理学の知識についても、目の前の花材や作品を例にあげて学ぶため、解釈がしやすくなる。中級は「いけばな療法」に関連する学問領域における理論・技法等の習得、実践時における不安や悩みを解決するなどのスーパーバイズの機会になっている。

しかしながら、「いけばな療法」を仕事として普及し、いけばな人口を増やしていくためには、資格制度を構築することや、その資格の維持の方法の考案、レベル別の体系的なプログラムの構築、既存のプログラム内容やカリキュラムの整理、養成プログラムと実践との往還を経た資格認定制度の在り方を検討すること、資格認定に係る規則等を定めていかなければならない。さらには、フラワーアレンジメント資格に国家資格があることで、仕事に就きやすいこと、若い人も学ぶきっかけになっていることを考えると、「いけばな療法士」の資格の国家資格を目指すことも今後の課題と考えている。

5.2 斯界を横断する研究分野の開拓

文化庁文化財部（2016）は、調査報告書の中で、伝統的生活文化に関して、茶道、華道ともに、斯界を横断する研究分野やとりまとめる組織がないことが課題だと何度も述べ、伝統的生活文化の学術的調査・記録、研究等の推進することが望まれると述べている。華道に関しては、日本いけばな芸術協会やいけばなインターナショナルといった全国規模の団体が存在しており、各地域にも京都いけばな協会など、華道流派の家元が集まる組織が存在している。しかし、学術団体を調査すると、国際いけばな学会が存在するが、他には関連する学術団体は存在しない。国際いけばな学会の目的は、いけばな（HPの原文のまま表記）実作者の抱える問題や疑問のうち、学問的な立場から解決を見出せるような点を考える会をめざすこと、研究者といけばな実作者、さらには諸々の研究関連の間における相互理解の場を提供することなどがあげられている（国際いけばな学会 2017）。

筆者らは、2019年2月10日に日本いけばな療法学会を医学、介護、心理、福祉、教育、行政、華道、花関連事業等の多様な分野と連携し、ソーシャル・イノベーションを軸にして学術研究団体を立ち上げた。その目的は、「いけばな療法の福祉、医療、教育、健康および社会的意義に関する研究、知識の普及および関係事業の発展を図り、まちづくり等への研究成果の応用を行い、いけばな療法に関わる学術分野の発展を目的とし、もって、花やいけばなを通じてその人らしく社会参加できる健康社会の実現ならびに人類の幸福に寄与することをめざす。」としている。

また「いけばな療法」の定義をこれまでの実践成果に基づき、「花に関するこれまでの概念を刷新し、いけばなを活用したセラピー、まちづくり、社会貢献活動などを通じたソーシャル・イノベーションの創出をめざすもの」としており、療法の適用範囲を社会にまで広げていることを明確に示している。

設立して二年ではあるが、その成果は、ソーシャル・イノベーションを軸にしたことで、華道界や心理、医学などの各学派や派閥の壁を乗り越え、2019年設立総会には90名、2020年の年次大会には50名の多様な分野の参加者が少しずつ集まりだしている。メディアの取材も複数受け、産経新聞では設立時に一面の全国版のニュースにとりあげられ、高齢者住宅新聞といった専門誌にも掲載され、注目度の高さに身が引き締まった。設立総会当日のディスカッションやアンケート結果からは、療法としてのエビデンスの強化、人材育成への要望が多く、学会への期待を多くの人が感じていることもわかった。なかでも、筆者が所属する流派ではない複数の他流派家元から賛同のメッセージが設立時にもらえたことは、華道界に風穴を空けることができたと感じさせた出来事となった。このように、この学会には、いけばなが、これまでには活用されていなかった分野も参加している。新しい分野でのいけばなの取入れ方法を積極的に議論し、検討することが期待できる。そして、この学会のもう一つの役割は、「いけばな療法士」の資格認定に取り組むことである。多様な分野の専門家や研究者があつまる学術団体が資格を検討し認定することで、第三者的視点が、その制度を客観的かつ公平に評価することとなり、現在の「いけばな療法士」養成プログラムの課題の解決にもつながるであろう。

5.3 いけばな療法の新しい試み

2020年4月7日から5月25日まで、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発令された。その結果、「いけばな療法」導入施設はすべて封鎖され、対面での講座もできなくなった。社会ではオンラインイベント、オンライン講座が急速に普及し、働き方もリモートワークが主流となり、対面での仕事が避けられるようになった。しかし、「いけばな療法」は、生きている花を扱い、その作品を制作することを他者とその場で共有することで、効果がうまれる。その絶対的な条件をなくす方法を急きょ考案しないといけなくなったのである。華道界においても、オンラインいけばな講座を各流派が組みだした。筆者らが取り組んでいるオンラインでの活動について、内容、対象者、その良い点と悪い点を次の表2に整理した。この表からわかることは、デメリットは、先に

述べたように、生きている花を互いに共有することができないという点は共通しているが、メリットも共通点として、気軽に誰もが参加しやすく、海外のような遠方の人でも拡散していけるという点があげられる。

また、新型コロナウイルスの感染リスクの高い、高齢者などは、今さらに社会とつながりが閉ざされてしまっている。しかし、表2にあるオンラインでの「いけばな街道」においては、施設内で制作したいけばなの画像を送信してもらい、その画像を実際に文化施設で、スターチスの花と一緒に展示する流れを作っており、この方法であれば、誰でも参加ができる。実際に、SNSでスターチスのいけばなの画像の投稿協力依頼をしたところ、現在500枚を超える画像が国内外の全くこれまでつながりがなかった人たちから集まってきている。

その中には、華道家の人も含まれており、所属流派は様々である。試みは始まったばかりのため、その成果を今後の「いけばな療法」の普及や実践者の育成にどうかしていかは、明らかではないが、華道界が直面する次の現状課題解決に有効な方法となる

表2 いけばな療法の2020年4月以降に始めたオンラインでの活動（筆者作成）

| 取り組み | 内容と目的 | 対象 | デメリット | メリット |
|--------------------|--|-------------------|--|---|
| オンライン「いけばな療法」 | 20分程度 材料は一輪の花とグリーン 目的：参加者の心のケア | 訪問できない施設 | ・長時間の集中が画面越しでは難しい ・施設職員の時間的拘束が生じる ・五感を通じて花を味わうことを一緒にできない | ・遠方であっても実施可能（海外も含む） ・大学生にも同時に参加してもらうなど、施設外の人と一緒に楽しめる |
| オンライン「いけばな療法士養成講座」 | 120分 これまで開講してきた講座内容をオンラインで実施 目的：いけばな療法士の養成 | 実践者の知識、技術を身につけたい人 | ・五感を通じて花を共有することが難しい ・伝えられるいけばなの技術に限られる | ・遠方であっても実施可能（海外も含む） ・すでに実践者として活動している「いけばな療法士」が学びをふりかえる機会として、講座に参加する仕組みとなった ・普及スピードが速い |
| オンラインでのいけばな制作方法の配信 | 3分適度の動画で、簡単にできるいけばな制作方法を SNS 配信 目的：いけばなの普及 | 視聴できる人なら誰でも | ・動画の作成スキルが必要 ・伝えられるいけばなの技術に限られる | ・広報に役立つ ・SNS 配信のため、普及の効果が大きい ・海外の人からの問い合わせも多い ・いけばな療法への関心につながる |
| オンライン「いけばな街道」 | SNS でスターチスの花を使ったいけばなの画像を #いけばな街道 につけてもらい募集し、その画像を印刷して、京都のまちなみや施設に認知症の人たちのいけばな作品と一緒に展示。展示の様子を動画や画像に撮影して、SNS で配信し、画像参加した人と共有する。 目的：社会とつながりが得られにくい状況の人が社会参加する機会を提供 | 視聴できる人なら誰でも | ・SNS を見ることができない人への対応 ↓ メールや郵便で対応 | ・広報に役立つ ・SNS 配信のため、普及の効果が大きい ・海外の人からの問い合わせも多い ・いけばな療法への関心につながる ・コロナ禍で置き去りになってしまう高齢者にも参加してもらえる |

ではないかと考えている。文化庁文化財局（2016）の調査により、財政的な負担から海外への展開を希望しているが、諦めている流派が多いということがわかっている。今回の「いけばな療法」のプログラムをオンライン講座で学んでもらう取り組みにより、華道の精神性を普及でき、技術面は制限されたとしても、華道に関する学術的理論は伝えることができるならば、資金をかけることなく、海外への華道の普及も可能になる。またオンライン「いけばな街道」の成果を検証することで、SNSを活用した、いけばなの本質を伝える活動の方向性も明確になり、華道界への貢献になるのではないかと考えている。これらのことを、さらに明らかにすることで、華道界の今後の展望を実現するために必要な条件としてあげた、「国内だけを対象とするのではなく、海外においても華道は社会的価値のあるものとなること。また、コストを抑えた、海外向けの普及方法があること。」という側面に「いけばな療法」は革新的なアイデアになるであろう。

6 おわりに

本研究では、華道のなりたちと歴史的に果たしてきた役割から、華道の本質を明らかにした。またその本質は華道の精神性、理念として特定の流派に関係なく、華道界全体が重要だと認識していることもわかった。しかしながら、華道界は携わる人の人口が激減し、資格取得をしても仕事に活かすことは困難であるがゆえ、若い世代からの関心が薄れ、文化継承も困難な状況と言えるほどの課題があることもわかった。そこで、課題の解決にいたるためには、斯界を横断する華道に関する取り組みや研究、とりまとめをする団体が必要なこと、海外を含む誰もが楽しめ、関心が持てる明確なプログラムと、華道を学ぶことで得られる資格制度を整えることが必要となった。2007年から2020年までの「いけばな療法」の実践をふりかえり、検証した結果、「いけばな療法」は、華道界が抱える現状課題解決につながる、必要要素を兼ね備えていることは、明らかになった。しかし、日本が長年にわたり、継承発展してきた華道文化の発展に寄与する活動として「いけばな療法」が確立されるためには、例えば新たな活用分野である医学や福祉、教育、まちづくりといった側面での効果の検証は最も重要な課題である。実際にこれら分野で「いけばな療法」が取り入れられ、その環境の中でどのような変化や便益があるのかを定性的、定量的な分析をしていく必要がある。つまり、「いけばな療法」が生み出す社会的インパクトの評価と、それを可視化していくことは今後の課題である。

注

- 1) 仏具呼称の一つ。香炉・燭台（火立）・花立て各一つずつで一組となる仏具のこと。
- 2) 基本形が成立した当初の立花は、真・副・副請・真隠・見越・流枝・前置という七つの役枝で構成されていた。
- 3) 華道において、天・地・人で格を作り、多様な摂理を表現する様式。流派によっては、体・用・留という場合もある。
- 4) いけばな界における各流派の提携を通じていけばな振興に関する事業を行い、いけばな芸術の昂揚とその普及啓発をはかり、もって、わが国の文化の向上発展及び豊かな人間性に根ざしたより良き社会の形成に寄与することを目的とする協会（日本いけばな芸術協会 2017）。
- 5) 厚生労働省、技能検定職種、生花等による花環、花束等の製作及び会場祭壇等の装飾に必要な技能の資格（厚生労働省 2017）。
- 6) 京都に家元がある華道流派が所属する協会。
- 7) 本能寺を家元とする華道本能寺の代表者。
- 8) いけばなを核として会員を募集し、研究者だけでなく、いけばなの実作者、つまりいけばなを学んでいる人、教えている人に対しても門戸を開放している。
- 9) いいね！ボタンについて Facebook は、いいね！することはユーザにとって「前向きなフィードバックを与え、気になることと繋がる」方法と説明している。
- 10) 他の人が投稿した記事や写真など、自分が見つけた情報を友達に広めることを「シェア」という。
- 11) 障害のある人もない人も、互いに支え合い、地域で生き生きと明るく豊かに暮らしている社会を目指すことを理念とする考え（厚生労働省 2020）。
- 12) 他者との相互作用を通して、自ら最適な状況を主体的に選び取り、その成果に基づく更なる力を獲得していくプロセス（厚生労働省 2010）。
- 13) 「社会的包容力」「社会的包摂」などと訳される。「全ての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、社会の構成員として包み支え合う」という理念（厚生労働省 2010）。
- 14) 共感的理解をする姿勢。共感的理解とは、「外からの評価的な理解ではなく、相手の私的内的世界における感情と個別的で主観的意義についての敏感な理解をする（Carl Rogers 1957）。

参考文献

日本語文献

- 井上治（2016）『花道の思想』思文閣出版。
- 井上治（2017）『歌・花・香と茶道』淡交社。
- 今井孝司（1999）「いけばなにおける沈滞要因の考察（1）いけばな史における考証」『京都精華大学紀要』17：116-132。

- NPO 法人フラワー・サイコロジー協会 (2016) 『Tutti Casa ニュースレター 2015 年活動報告書』NPO 法人フラワー・サイコロジー協会。
- 熊倉功夫 (2012) 『茶の湯といけばなの歴史—日本の生活文化—』左右社。
- 小林善帆 (2007) 『「花」の成立と展開』和泉書院。
- (2013) 「いけばな史試論 (前編) 古代～近世」『いけばな文化研究』1: 3-23。
- (2013) 「いけばな史試論 (後編) 近代・現代」『いけばな文化研究』2: 1-16。
- 勅使河原茜 (2011) 『いけばな—出会いと心をかたちにする—』角川書店。
- 認知症患者治療ガイドライン作成合同委員会 (編) (2010) 『認知症患者治療ガイドライン』医学書院。
- 認知症診療ガイドライン作成合同委員会 (編) (2017) 『認知症患者診療ガイドライン』56-58, 医学書院。
- 浜崎英子 (2010) 「一輪の花で心豊かな生活を—花を用いたセルフセラピー—」『主任&中堅+こころサポート』日経研出版 19(4): 9-13。
- (2011) 「認知症ケアのいけばな療法—花やいけばなを通したコミュニケーション—」『認知症介護季刊誌』12(2): 32-37。
- (2013) 「花の持つ力の活用—いけばな療法の実践—」『高齢者安心安全ケア実践と記録』11(2): 29-38。
- (2017) 「認知症非薬物療法としての「いけばな療法」による社会変革—フラワー・サイコロジー型華道の確立を通じて—」『同志社大学大学院総合政策科学研究科修士論文』。
- 肥原碩甫 (2005) 『新編未生流いけばな教本』講談社。
- 福祉士養成講座編集委員会 (2008) 『新版社会福祉士養成講座 10 心理学』中央法規出版 35。

外国語文献

- Murray, R., Caulier-Grice, J., and Mulgan, G. (2010) *The Open Book of Social Innovation. Social Innovator Series*. The Young Foundation and NESTA.
- Rogers, Carl (1957) "The Necessary and Sufficient Condition of Therapeutic Personality Change," *Journal of Counseling Psychology* 21(2): 95-103.

URL

- 日本いけばな芸術協会 (2017) 「協会について」(2017 年 12 月 28 日取得, <http://www.nihonikebana.or.jp/>)
- 総務省統計局 (2016) 「社会生活基本調査」総務省統計局ホームページ (2020 年 8 月 15 日取得, <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/index.htm>)。
- フラワーデザインの資格・検定 (2017) 日本フラワーデザイナー協会ホームページ (2020 年 8 月 15 日取得, <http://www.nfd.or.jp/qualification-and-approval>)。
- 文化庁文化財部 (2017) 『平成 27 年度伝統的生活文化実態調査事業報告書』。(2020 年 8 月

15日取得,

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/dentotekiseikatsu_jittai/pdf/h27_dentotekiseikatsubunka.pdf)。

フェイスブック Facebook (2017)「KSKC フェイスブックページ」(2017年12月30日取得,
<https://www.facebook.com/KSKC1996/>)。

池坊 (2017)「いけるころとは? いけばなの根源」華道家元池坊ホームページ (2017年9月28日取得, <http://www.ikenobo.jp/ikebanaikenobo/ikebana/>)。

国際いけばな学会「趣旨」(2020年8月15日取得, http://www.ikebana-isis.org/p/blog-page_14.html)。

厚生労働省 (2017)「技能検定職種及び等級区分」(2020年8月15日取得,

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/shokugyounouryoku/ability_skill/ginoukentei/syokusyu.html)。

厚生労働省 (2020)「障害者の自立と社会参加を目指して」(2020年8月20日取得,

<https://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoven/idea01/index.html>)。

厚生労働省 (2010)「総論」子ども子育てビジョンー子どもの笑顔があふれる社会のためにー (2020年8月20日取得, <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihovenfukushibu/0000123633.pdf>)。